

CURES Salon

新疆ウイグル自治区（中国）訪問記

橋本哲哉

今夏は久しぶりに暑い夏だったが、その8月末から2週間、新疆ウイグル自治区（以下新疆と略す）を訪問する機会を得た。環日本海時代といわれてすでに5年程の時がたとうとしているが、その波に乗って「とうとう中国西域まで来てしまった」、というのが正直な感想である。訪問の簡単なレポートをここに提出するが、それは新疆地区が現在抱える地域社会問題という観点に限定する。

まず、出かけた動機と訪問先を要約しておこう。金沢大学の国際化にともなって、留学生の急増が続いているが（本10月現在全学で約160名、内3割は経済学部所属）、そのひとりに新疆出身の院生（理学研究科修士）がいる。中国人と呼ばれるのを嫌うが、いわゆる漢民族とはまったく違う容姿で、もちろんウイグル族である。ある友人を介して金沢大学に入学する手伝いをしたことから、彼の身元保証人を私が引き受けているが、その一時帰郷に同行したわけである。上海・ウルムチ・イリ・トルファン・カシュガル・北京という旅程であったが、留学生の出身地であるカシュガルに一番長逗留した。ウルムチは新疆の中心に位置する首都で、100万の大都会である。上海から中型ジェット機で5時間のここにも都市化が進行しており、アンバランス（20階建ての近代的ホテル—何とシングル1泊6万円とあって—があるかと思うと、日干しレンガの崩れかかった民家も散見）な状況も目についた。イリ、トルファンはシルクロードの観光地で、カシュガルはウルムチから西にジェット機で1時間半、天山北路・南路の合流点にある新疆の第2の大都市。

さて、私が気づいた新疆の社会経済の現状

から述べてみよう。廻ったところは都市中心であったが、一部農村（果樹農家）も見聞した。日本人はやはり少なく好奇の目にさらされたが、治安状態は非常に良く、一度も不安な気持ちにならなかった。生活必需品の量の多さには、少なからず驚かされた。1990年にロシアへ私は出かけているが、当時のイルクーツクよりその水準ははるかに上をいっている。事実、ロシアから人勢買い出しに来ているのを見かけた。当然ながら物価も安い。前評判通り果物のうりは大変に美味で、ラグビーボールほどの1個1元（25円）。日本の完熟メロンといった感じで、輸出すればすくなくとも100倍で売れると言って売り子を冷やかすと、「一緒に商売しよう」と身を乗り出してきた。食生活の中心は羊で、これは少々高く肉1kg200円。味は日本のマトンとはまったく異なり、くせのない食べやすいもので、とくにシシカバブ（串焼き）はうまい。しかし、毎日3度3度とも脂っこい羊料理が続くので、次第にこたえてくる。主食はナンで、米・うどん（製法は日本とまったく同じ）も出された。

インフラの整備状況は多くの実例をあげる余裕はないが、一言でいってきわめて遅れている。よく指摘されるように、この面での中国東部の沿岸地域との格差は相当にある。道路の真ん中が一応舗装されている程度で側溝は未整備、したがって垂れ流し状態だった。鉄道は重視されておらず（日本ではロシアとの新線接続が話題となっているが、1週間に1列車とか）、長距離輸送はトラック、市内物流はロバ車と自転車にも依存していた。

最も問題を感じたのは、中国政府のいう辺

境少数民族保護政策の内実である。インフラの遅れは、漢民族中心政府が投資をしないからだ、というウィグルの人々の非難は的はずれではない。新疆の行政や企業の実権は漢民族によって統制されており、その有様を若干ではあるが体験した。銀行の窓口はウィグル人が担当しているが、現金の出し入れは漢民族が独占し、彼が席を外すといつま



▲カシュガル師範学院正門前にて

でも両替を待たされる。国際電話だけは漢民族の職員が取り扱うという具合である（何回か挑戦したが、1度も日本に電話は通じなかった）。人物の紹介の際「この人はウィグル人だが、漢民族と互角に仕事をしています」という表現がよく使われたが、そこに抵抗の思想を垣間見た思いであった。ちなみに円はスムーズには流通せず、やはりドルが強いこともわかった。円が強いというのは為替上のことで、普段見慣れない1万円札を受け取るのを銀行は渋り（偽札の見分けがしにくい）、使い慣れたドル札を歓迎するのは道理である。

広大な中国全土を統括する政府にはそれなりの言い分はあろう。「まず沿岸地域を開発して、その力を奥地に浸透させる」政策は、理解できないことはない。しかし、すくなくとも少数民族は「保護を受けていない」と考えている事実は存在する。ちょうど2年前にウルムチで漢民族に対する蜂起があった。結局つぶされてしまったが、「3日間、漢民族は外に一歩たりとも出られなかった」と少数民族は語り継いでいた。

一方、宗教的（ほぼ完全に近いイスラム教圏）かつ民族的な結束力は非常に強く、また家族的血縁的関係も深い。もちろん男尊女卑で、家父長制的な問題点もそこには内包してはいるが、独立した精神と文化が聳え立って

いるとってさしつかえない。

最後に、今回の主たる目的の学術交流について言及する。留学生の出身大学であるカシュガル師範学院（日本の教員養成大学とは違って、より広義の意味を持つ言葉として理解される）を訪問し、学長と面会する時間を確保した。予想以上に整備されており、日本の学生より若やいだ活気を感じる雰囲気の良い大学であった。一般的に学校は他の施設と比較すると、整備されているという印象を抱いた。短い面会時間であったが、学長（ウィグル人であった）の口からは中央政府・新疆自治区政府との交渉（予算や権利を獲得するための）の話が多く、まだ外国大学との学術交流の余裕はなさそうであった。ここにも差別されている現実の一端がうかがえた。

この間われわれは環日本海時代を評価し、その発展にそれなりに協力してきた。その大きな行く末に疑いはない。しかし、沿岸地域との格差を目のあたりにし、ここでレポートしたような漢民族の少数民族に対する上からの統制と民族差別が続くならば、当分の間西域・奥地の発展はおぼつかないことも認識しなければならない。環日本海政策の波及効果といった点も考えながら、国際交流をすすめる段階がそろそろ近づきつつあると予感した次第である。

（金沢大学経済学部教授）